



Tokyo Gakugei University Repository

東京学芸大学リポジトリ

<http://ir.u-gakugei.ac.jp/>

|            |   |
|------------|---|
| Title      | アメリカ地理教育の成立に関する研究(I) : J.モースの『アメリカン・ユニバーサル・ジオグラフィー』を中心に( fulltext )             |
| Author(s)  | 田部,俊充   |
| Citation   | 学芸地理(60): 5-16  |
| Issue Date | 2005-00-00  |
| URL        | <a href="http://hdl.handle.net/2309/87469">http://hdl.handle.net/2309/87469</a> |
| Publisher  | 東京学芸大学地理学会  |
| Rights     |   |

## アメリカ地理教育の成立に関する研究 (I)

— J. モースの『アメリカン・ユニバーサル・ジオグラフィー』を中心に —

田部 俊充

## I はじめに

従来のアメリカ合衆国における社会科教育成立史の研究では、社会科はダンが中心となってまとめた1916年の全米教育協会 (NEA) 中等教育改造審議会社会科委員会報告において成立したとすることが通例であった。そして、社会科成立期以前は、多くの知識を注入する悪しき地理教育や歴史教育が中心であったとされ、その評価は低かった。このような中で、森分 (1994) はアメリカにおける地理科、歴史科、公民科から社会科へという成立の過程を再評価している。そして、新教育の父と呼ばれ、1875年にマサチューセッツ州クインシー市教育長となって進歩的な教育改革の活動の中心となって活躍し、1901年に初代のシカゴ大学教育学部長となったパーカー (Parker, F. W.) を取り上げている。さらに、コロンビア大学ティーチャーズ・カレッジのドッジ (Dodge, R. E.)、シカゴ大学のチェンバリン (Chamberlin, T. C.) らの地理教育論を分析し、評価している。森分の業績はアメリカ地理教育成立史の領域において高く評価できる。しかし、「社会科地理の成立につらなる改革運動は、1885年のパーカーの活動から始まる」(森分, 1994: 605) とし、社会科成立以前には独立した教科であった地理教育の成立についてはほとんど言及していない。

一方、1995年にカンザス州立大学のスミス (Smith, B. A.) が全米社会科教育学会75周年記念号に発表した論文「社会科とNCSSの誕生1783年-1921年」は、学界に波紋を投じた (Smith et al., 1995)。アメリカ東部沿岸のイギリス領13植民地と本国イギリスとの独立をめぐる一連の紛争であるアメリカ独立革命 (1775-1783) (American Revolution) が終結した1783年に社会科の原型が誕生した、という説である。アメリカは1783年に独立革命を終結させ、岐路に

立っており、その中で、いわゆる建国期のアメリカは国家が長続きするような教育の必要性に迫られたということである (Smith et al., 1995: 393)。

このような中で重要な教科として登場するのが教科＝地理である。アメリカ独立革命の指導者で第2代大統領 (在任1797～1801年) のアダムズ (Adams, John 1735-1826) も地理教育の重要性を唱えた一人である (Cremin, 1980: 249)。アダムズはジェファソン (Jefferson, Thomas 1743-1826) に、「人民にとって実用的で価値のある有用な教科は何であるか」と尋ねられて、地理、歴史、年表の学習と答えている (Cremin, 1980: 249)。

その後、アメリカ合衆国においては地理教育が歴史教育とともに尊重され発展する時期が、建国期から100年以上続くのである。本稿では、アメリカ地理教育が成立する建国期において地理教育がどのようなものであったのか、そしてそれはなぜそうした性格のものとして形成されたのかを試論的に検討していくことを目的とする。

日本の社会科はアメリカ社会科をモデルとしているが、教科としての性格があいまいなため、学校教育における地位が不安定なものとなっている。そして、社会科に含まれる地理教育はさらに低い評価に甘んじている。アメリカ社会科の形成過程において地理教育がいかなる位置を占めていたのかを検討することが、地理教育とは何か、地理教育はいかにあるべきか、という地理教育を再評価する論議につながると確信する。

以上のような視角から本稿は、II章においては近年のアメリカ地理教育史研究および社会科教育史研究の概要と課題を整理する。次にIII章においては、アメリカ地理教育成立期にあたる建国期において地理教育が必要とされた背景を、建国の中心となったジョン・アダムズとサミュ

エル・アダムズ(Samuel, Adams 1722-1803)の往復書簡を中心に扱いたい。そして、IV章においては建国期における代表的な地理学者モース(Morse, Jedidiah 1761-1826)の地理書『アメリカン・ユニバーサル・ジオグラフィー』(*American Universal Geography*, 1793)の具体的記述を分析したい。

## II アメリカ地理教育成立史研究の動向

2003年6月15日から20日までハーバード大学教育学大学院図書館では、特別展示「地理教科書と地図帳 1802年-1934年」が行われた。出展されていた地理教科書・地図帳の一覧表を作成すると、全61点が示されていた(第1表)。

その筆頭に挙げられているのが、モースの『易しい地理』(1802年版)であった。このようにアメリカ教育学研究でも地理教科書研究が注目されており、その中でも建国期の地理教育、地理教科書は注目を浴びている。研究史を遡るとブラウンに建国期の地理教育研究を認めることができる(Brown, 1941)。

日本においては、アメリカ建国期や19世紀の地理教育の実態把握はほとんど注目されていない。教育思想史研究では、北野(2003)が19世紀初期のコモン・スクール教科書を分析する中で、モースの『地理の初歩』(*Elements of Geography*, 1795)を取り上げている(北野, 2003)。田部は、建国期のデーヴィッドソンの『地理簡約』(*Geography Epitomized*, 1784)、モースの『易しい地理』(*Geography made easy*, 1790)の2冊の地理教科書に焦点をあて、当時の地理教育成立史をまとめたが、その概要の説明に終わった(田部, 2001)。

一方、アメリカの地理教育史研究の第一人者であるスミスはアメリカ社会科の萌芽は建国期にみられたと指摘し、草創期のジョン・アダムズ、モース、ベンジャミン・ラッシュといった地理教育に貢献した人物や当時の地理教科書、地理教育を再評価している(Smith et al., 1995)。また、イリノイ州立大学のウォルターズ(Walters, William D.)は地理教育史の立場から、南北戦争前の地理教育は不毛であった、と従来からのネガティブな評価を繰り返している(Walters, 1987)。この時代は、教授法の面から

みると記憶が過度に強調され、ヨーロッパの近代教育学の影響を受けることができなかったとしている。そして、アメリカの地理教育形成期を19世紀初頭のデーヴィッドソン、モース、パティロ、ウッドブリッジ、ミッチェルらからギョー(Guyot, Arnold 1807-1884)の出現までの時代としている。さらに、シラキュース大学の地理学者のショートは、アメリカのナショナル・アイデンティティを形成する過程で地図が多様な役割を担ったことを豊富な地図資料をもとに明らかにしている(Short, 2001)。そして、アメリカ地図学の黎明期においてモースの著した著作の貢献が高かったことを繰り返して言及している。ショートのカバー挿絵には、モース一家が地球儀を囲んでいる様子が示されている(Short, 2001)。

歴史学研究においても建国期の地理教科書に注目する研究成果が誕生している。コルビー大学の歴史学者のモスは、地理教科書を通して新しい国家アメリカを描いたのはモースだったとして、ブラウンの示した地理学者としてのモースの立場を再評価している(Moss, 1995; Brown, 1941)。また、デンバー大学の歴史学者シュルテンは、ウェブスターは、建国期の「アメリカ人」のナショナル・アイデンティティの形成に言語体系の基礎を築くことによって貢献し、モースは、独立国家としての地誌的イメージを形成することに寄与している、と評価している。これは、それまで各地に散在していたアメリカ地誌情報を『アメリカン・ユニバーサル・ジオグラフィー』として編集したことを指している(Schulten, 2001)。

また、歴史学研究においては、18世紀の「啓蒙主義的歴史学」の再評価が進んでいる。岡崎は、18世紀後半のドイツ啓蒙主義歴史学において、「キリスト教的世界史から科学的世界史へ」あるいは「普遍史(Universalhistory)」から世界史(Worldhistory)へ」の転換が行われたと指摘している(岡崎, 2000:3)。これは古代ローマ時代以後、千年以上の伝統を有する、聖書を直接的な基盤として記述されたキリスト教的世界史=普遍史から、今日の世俗的・科学的世界史への転換が行われた、というのである。岡崎の注目したゲッティンゲン大学のガッターラー(Gatterer, Johann Christoph 1727-1799)は、独

第1表 アメリカ合衆国で出版された地理教科書・地図帳リスト(1802-1934年)

|    |       |   |
|----|-------|---|
| 1  | 1802年 | 『易しい地理』 <i>Geography made easy</i> モースMorse, J.(1761-1826)著   |
| 2  | 1812年 | 『地理の易しい文法』 <i>An easy grammar of geography</i> フィリップスPhillips, R.(1767-1840) 著  |
| 3  | 1822年 | 『易しい詩による世界記述』 <i>The world described, in easy verse</i> リンチLynch, W. R. 著   |
| 4  | 1822年 | 『地球儀の利用による問答式教授』 <i>A catechism of the use of the globes</i> ウィルキンスWilkins, S. 著  |
| 5  | 1827年 | 『歴史地図帳』 <i>Ancient atlas</i> ウッドブリッジWoodbridge, W. C. (1794-1845) 著   |
| 6  | 1830年 | 『最新地理の実用的体系』 <i>A practical system of modern geography</i> オルネーOlney, J. J.(1798-1872) 著  |
| 7  | 1830年 | 『マルテ・ブリュン学校地理図解地図帳』 <i>Atlas, designed to illustrate the Malte-Brun school geography</i> グッドリッチGoodrich, S. G. (1793-1860) 著      |
| 8  | 1831年 | 『最新地図帳』 <i>Modern atlas</i> ウッドブリッジ著  |
| 9  | 1834年 | 『ピーター・パーレー子どもへの地理の教え方』 <i>Peter Parley's method of telling about geography to children</i> グッドリッチ著                                |
| 10 | 1834年 | 『歴史地図帳』 <i>Ancient atlas</i> ウッドブリッジ著   |
| 11 | 1835年 | 『万国地理史の要約のための地図帳』 <i>Atlas designed to illustrate the abridgement of universal geography</i> ブラッドフォードBradford, T. G.(1802-1887) 著 |
| 12 | 1836年 | 『海洋交易と陸上交易』 <i>The Book of commerce by sea and land</i> 作者不詳  |
| 13 | 1838年 | 『ピーター・パーレー聖書地理の教え方』 <i>Peter Parley's method of telling about the geography of the Bible</i> グッドリッチ著                              |
| 14 | 1838年 | 『ハンチントン最新地理入門』 <i>Huntington's introduction to modern geography</i> ハンチントンHuntington, N. G. (1785-1848)著                          |
| 15 | 1839年 | 『万国地理の体系に付随する地図帳』 <i>Atlas to accompany A system of universal history</i> ウィラードWillard, E.(1787-1870)著                            |
| 16 | 1840年 | 『地図の質問の組み合わせ』 <i>Union map questions</i> 作者不詳   |
| 17 | 1841年 | 『ボストン学校地図帳』 <i>Boston school atlas</i> . フランクリンFranklin, B. 著   |
| 18 | 1845年 | 『マサチューセッツ子どものための初等地理』 <i>An elementary geography for Massachusetts children</i> フォールFowle, W. B.(1795-1865)著                      |
| 19 | 1846年 | 『ピーター・パーレー初心者のための地理』 <i>Peter Parley's geography for beginners</i> グッドリッチ著  |
| 20 | 1846年 | 『地理の体系的見方』 <i>A systematic view of geography</i> ウォーレンWarren, W. 著  |
| 21 | 1846年 | 『スミス地理の最初の本』 <i>Smith's first book in geography</i> スミスSmith, R. C.(1797-1875)著   |
| 22 | 1846年 | 『地理・歴史の概要』 <i>Outlines of geography and history</i> . エマソンEmerson, F.(1788-1857)著   |
| 23 | 1847年 | 『スミス2番目の地理の本』 <i>Smith's second book in geography</i> スミス著  |
| 24 | 1847年 | 『わたしの小さな地理』 <i>My little geography</i> トウーティルTuthill, L. C.(1798-1879)著   |
| 25 | 1847年 | 『スミス地理の最初の本』 <i>Smith's first book in geography</i> スミス著  |
| 26 | 1851年 | 『詩的な地理』 <i>The poetical geography</i> ウォータースWaters, G. 著  |
| 27 | 1852年 | 『国民地理』 <i>A national geography</i> グッドリッチ著  |
| 28 | 1853年 | 『自然地理』 <i>Physical geography</i> サマービルSomerville, M.(1780-1872)著  |
| 29 | 1855年 | 『コーネル初等地理』 <i>Cornell's primary geography</i> コーネルCornell, S. S. 著  |
| 30 | 1858年 | 『コルトン・フィッチ最新学校地理』 <i>Colton and Fitch's Modern school geography</i> フィッチFitch, G. W.  |
| 31 | 1858年 | 『フランクリン地球儀の手引き』 <i>The Franklin globe manual</i> 作者不詳   |
| 32 | 1860年 | 『シェパード特許黒板地球儀の説明・推薦』 <i>Explanations and recommendations of Shepherd's Patent Slate Globes</i> 作者不詳                               |
| 33 | 1862年 | 『ギョー黒板地図作業カード』 <i>Guyot's slated map drawing cards</i> サンドSandoz, E. 著  |
| 34 | 1868年 | 『地球とその住民』 <i>The earth and its inhabitants</i> ギョーGuyot, A.(1807-1884)著   |
| 35 | 1872年 | 『地理学習入門』 <i>Introduction to the study of geography</i> ギョー著   |
| 36 | 1872年 | 『図解学校備品一覧』 <i>Illustrated catalogue of school merchandise</i> ハメットMammatt, J. L. 著  |
| 37 | 1873年 | 『モンティース総合地理』 <i>Monteith's comprehensive geography</i> モンティースMonteith, J. 著   |
| 38 | 1874年 | 『ドゥーイアー学校備品代理店』 <i>Dwyer's School Furnishing Agency</i> ドゥーイアー著   |
| 39 | 1875年 | 『コーネル初等地理』 <i>Cornell's primary geography</i> コーネル著   |
| 40 | 1875年 | 『自然・政治地理』 <i>James. Physical and political geography</i> モンティース著  |
| 41 | 1875年 | 『自然地理』 <i>Physical geography</i> コーネル著  |
| 42 | 1875年 | 『地理初等課程』 <i>Elementary course in geography</i> スウイントンSwinton, W.(1833-1892)著  |
| 43 | 1876年 | 『コモン・スクール地理』 <i>The common-school geography</i> ウォーレン著  |
| 44 | 1880年 | 『地理的遊び』 <i>Geographical plays</i> アンドリュウAndrews, J.(1833-1887)著   |
| 45 | 1880年 | 『コルトンのコモン・スクール地理』 <i>Colton's common school geography</i> コルトンColton, J. H. (1800-1893)著  |
| 46 | 1882年 | 『ミッチェル新学校地図帳』 <i>Mitchell's new school atlas</i> . ミッチェルMitchell, S. A.(1792-1866)著   |
| 47 | 1885年 | 『新自然地理』 <i>New physical geography</i> モンティース著   |
| 48 | 1885年 | 『バーンズ完全地理』 <i>Barnes's complete geography</i> モンティース著   |
| 49 | 1886年 | 『私たちの世界—初めての子どものための地理—』 <i>Our world, or, First lessons in geography for children</i> ホールHall, M. L. 著                            |

|    |       |   |
|----|-------|---|
| 50 | 1891年 | 『学校・図書館で利用する地理を志すものための展示カタログ』 <i>Catalogue of the exhibition of geographical appliances used in schools or libraries</i> 作者不詳 |
| 51 | 1899年 | 『最初の授業』 <i>First lessons</i> ダントンDunton, L.(1828-1899)著   |
| 52 | 1908年 | 『世界一周』 <i>Around the world</i> トールマンTolman, S. W. C.著   |
| 53 | 1909年 | 『地理の野外学習』 <i>Out of door studies in geography</i> ファルツFultz, F. M.(1857-?)著   |
| 54 | 1909年 | 『初等地理』 <i>Elementary geography</i> キングKing, Charles F. (1843-?)著  |
| 55 | 1910年 | 『アメリカの隣人たち』 <i>Our American neighbors</i> ウインズローWinslow, L. O. 著  |
| 56 | 1912年 | 『初等地理』 <i>Primary geography</i> スタインヴェルSteinwehr, A. (1822-1877) 著  |
| 57 | 1914年 | 『バーバラのフィリピンへの旅』 <i>Barbara's Philippine journey</i> 作者不詳  |
| 58 | 1917年 | 『子どもと一緒に世界一周』 <i>Around the world with the children</i> カーペンターCarpenter, F. G. (1855-1924)著                                   |
| 59 | 1918年 | 『アメリカの資源・産業』 <i>Resources and industries of the United States</i> フィッシャーFisher, E. F.(1873-?)著                                |
| 60 | 1927年 | 『小川のはなし』 <i>The brooklet's story</i> フライFrye, A.E.(1859-1936)著  |
| 61 | 1934年 | 『多くの大陸を巡る旅』 <i>Journeys through many lands</i> スタールStull, D. F. (1885-1938)著  |

(2003年6月15 - 20日にマサチューセッツ州ハーバード大学およびメイン州南メイン大学で開催された第20回国際地図学史学会議展示物により作成)

立した歴史学確立のために、地理学をはじめとする隣接諸科学とは異なる歴史学の特質を考究し、その独自の性格を主張するための理論的活動を活発に行う。興味深いのは、歴史学と関係科学との関係を確立するために、地理教科書も著している点である。

### Ⅲ 地理教科書誕生の背景の一要因

建国期の地理教科書誕生の背景について、田部(2001:19)では、国家の統合が長続きするような価値と責任を国民に教育する必要があり、そのために新しい科学であった地理の教育が重要視されたことを指摘した。本章では、成立期における地理教科書誕生の背景を探るために、ジョン・アダムズとサミュエル・アダムズの論争から、アメリカの共和主義思想における「公共の徳」と「公共の善」について論じたい。先述したように、ジョン・アダムズは建国期におけるフェデラリスト党のリーダーで大統領も経験していることもあり、地理教育の萌芽期においてその成立に多大な影響を与えている。一方のサミュエルも米国独立戦争の指導者として著名であり、タウンゼンド諸法への闘争やボストン虐殺につながるデモを組織し、ボストン茶会事件の指揮をとるなど、理論家として重要な役割を果たした。二人の共和主義思想をめぐる論争とアメリカにおける公教育形成との関連を地理教育の視点から考えてみたい。

ジョンとサミュエルの論争については北野(1994)に取り上げられているAdams(1971)に詳

しい。ここで取り上げるのはおもに1790年のサミュエルとジョンの往復書簡である。サミュエルに代表される反連邦主義者は、共和国の徳を教授する手段として公教育の普及を提唱した。そのサミュエルの考え方はジョンへの手紙からも明確に読み取ることができる(Adams, 1971: 414; 北野, 1994: 95)。

聖職者、哲学者、政治家、愛国者を団結させ、彼らの努力を幼い少年、少女を教育することの重要性を人々の精神に認識させることによって、その世代を健全な状態に回復するべきです。

サミュエルの人民主権とそのための公教育の思想がよく表れており、これは多くの反連邦主義者の共通した気持ちであったのだろう。この手紙の書かれた1790年はアメリカが連合から連邦へと変貌していく時期であり、1787年起草、1788年発効、そしてそれから現在まで使われている連邦憲法制定の時期と重なっている。この連邦憲法案は多くの批判と攻撃とにさらされながら誕生したのである(斎藤, 1992: 233-234)。それは次の言葉にも表れている(Adams, 1971: 421, 北野, 1994: 96)。

すべての主権が本質的に人民にあるのではないですか。統治はすべて人民の福祉と幸福のために計画されるのではないですか。

一方、ジョンは、初期においてはサミュエル

と同様に知識普及による人民の「自己陶冶」と「有徳化」を考えていた。ジョンの共和主義思想はホイッグ派の「古典的共和主義」思想を継承するものであり、人民こそが徳を維持するものであり、共和制体を維持する具体的前提として、人間本性のあるべき姿を「公共の徳」や「公共の善」に求めていた(北野, 1994:91)。懐疑主義と経験主義の発展に貢献したイギリスの哲学者ヒューム(Hume, David 1711-1776)は、善と悪の概念は合理的なものではなく、自分の幸福への関心から生まれる、と主張している。ヒュームの見解によれば最高の道徳的善は博愛、つまり利他的な福祉の尊重であった。このように博愛主義的な思想という点でヒュームの強い影響を受け、これがサミュエルたちの考え方と同様に公教育の普及につながっていくはずであった。ヒュームの博愛主義的な思想は、ベイリン(Bailyn, B.)の共和主義思想論に通じるものがある。ベイリンは、独立革命の思想には共和主義の思想に属する系譜のものがあることを発見する(有賀, 1994:200-201)。共和主義では個人よりも社会全体の利益、すなわち「公共の善」が重視され、公共善を実現するために個人の私的な利益をおさえねばならないとみる、共同体的な性格がある。この私的利益を抑制する個人の徳が「公共の徳」ととらえられ、共和国が存立する要と考えられていたのである。

しかし、マサチューセッツ州(邦)におけるアメリカ独立革命軍の元大尉ダニエル・シェースを指導者とする武装した農民たちが起こしたシェースの反乱Shays' Rebellion (1786-87年)やフランス革命(1789年)の勃発により、ほかの連邦主義者と同様、「徳による共和制体」や「主権」の問題を再検討し始めたのである(北野, 1994:94)。

ジョンをはじめとする連邦主義派が共和主義に関する考え方を大きく変えるに至ったのは、とりわけシェースの反乱の影響が大きかったようである。シェースの反乱は、1786年7月に起こったマサチューセッツ州の西部農民たちによる暴動であった。経済不況で債務の返済に窮した有権者が、各諸州議会に紙幣の増発を求め、それを法定通貨として流通させることを要求した。多くの州はその要求にかなりの程度応じたが、マサチューセッツ州ではそれに応じず、反乱が

起こった(有賀, 1994:184)。この暴動により、参加者は紙幣の増刷を求め、裁判所を襲い、連邦政府派遣の兵士と衝突した。1887年2月には鎮圧されたが、全国を震撼させることになる(明石, 1999:84)。

シェースの反乱の発生により、それまでマサチューセッツの指導者は中央権力の強化には消極的であったが、この反乱によって態度を変えるようになった。また、この反乱は中央の保守派にも多大な影響を与える。ウェブスター(Webster, Noah 1758-1843)はこの反乱を知ったとき、「民衆の無知に支配されるくらいなら、制限君主政のほうがはるかにましだ」と語ったほどであった。連邦議会においても、人民の政治参加をめぐる議論が白熱していた。コネチカット州代表ロジャー・シャーマンは「人民による選挙に反対し、州議会の選出とすべきである。人民は、できるかぎり政府のことに干渉させらるべきでない。彼らは情報に欠き、絶えず誤り導かれやすいからである」と主張した。マサチューセッツ州代表エルブリッジ・ゲリーも、「われわれが現在経験している災禍は、民主政の行きすぎからきている」とシャーマンに同調した(斎藤, 1992:242)。

しかし、ワシントン(Washington, George 1732-1799)は、諸州の上流階級のあいだに君主政の見直し論が出てきたことにふれ、「この国の平和を根底から揺さぶることなしに君主制を採用できる時期にまだ来ていないことは確かだ」と述べ、多くの権限を州政府から全国的な政府に移すことによって安定した共和政を樹立しようとした(有賀, 1994:182-183)。

それはジョンの手紙の中の「社会の安全に対して十分に有効であるというこれまでの見解に絶望した」(Adams, 1971:415;北野, 1994:95)という部分によく表れている。そして、統治のための諸制度を構築することの重要性に気づく。君主、貴族、人民、扇動政治家ではなく、「人類の中に自然に、かつ現実的に生まれた貴族階級」であり、人望を備えた人々である、としている。新しい時代の共和主義を模索していたジョンの苦悩が見られる。

ヨーロッパにおいてはフランス革命によって選挙権を基礎におく共和制が誕生したが短命におわり、続いて起こったナポレオン戦争は、大

陸にのこっていた封建社会構造に対する政治的な攻撃が軍事行動としてひろがったものであり、その結果として最終的に新時代の共和主義が誕生している。1776年のアメリカ独立革命にはじまった近代共和政で、アメリカ独立宣言によりアメリカの中心的な政治思想に共和主義が位置するようになっていく過渡期のこの往復書簡は、やがて近づく自由主義の導入を予感させてくれる。

シェースの反乱は無秩序状態を引き起こし、このような反乱が各地で起きる心配があったため連邦主義者たちは現実路線を採用せざるを得なかったのである。しかし、この様相もジェファソンが第3代大統領に就任する頃には変化していく。ジェファソンは1787年のマディソンへの書簡で「治安を確保するのに最善の途は、政府を強力にすることによってか、それとも人民に情熱を与えることによってか」と問い、後者こそ最も確かなものとし、そのための教育を重視する。そこでは徳性＝公德心が重視されていた(斎藤, 1992: 403)。

以上のような考察から仮説的に推察すると、地理教育成立の背景には実用的な教科としての役割とともに、共和主義思想の啓蒙という側面もあったのではないかと考えられる。そして建国期における公教育の導入は、シェースの反乱のような政治的な混乱の中で先送りされることになる。このような時代背景の中で、地理教育は当時の最先端の科学教育として歓迎され誕生する。それは、各地の特徴、簡単な歴史だけでなく政治制度論も含んでおり、人民の関心を呼ぶとともに、啓蒙のツールとして重要な役割を担っていたのである。次章においては、実際の地理教科書の地誌記述について言及したい。

#### IV 『アメリカン・ユニバーサル・ジオグラフィ』(1805年版)の地誌記述について

モースは、ボストン近郊チャールズタウンのプロテスタント会衆派教会牧師として要職をつとめながら、『易しい地理』、『アメリカン・ユニバーサル・ジオグラフィ』などの地理教科書を執筆した(田部, 2001)。本稿では『アメリカン・ユニバーサル・ジオグラフィ』の「地理学」の概念、「アジア記述」に関する記述を中心に

検討し、その地誌記述の特徴をまとめた。

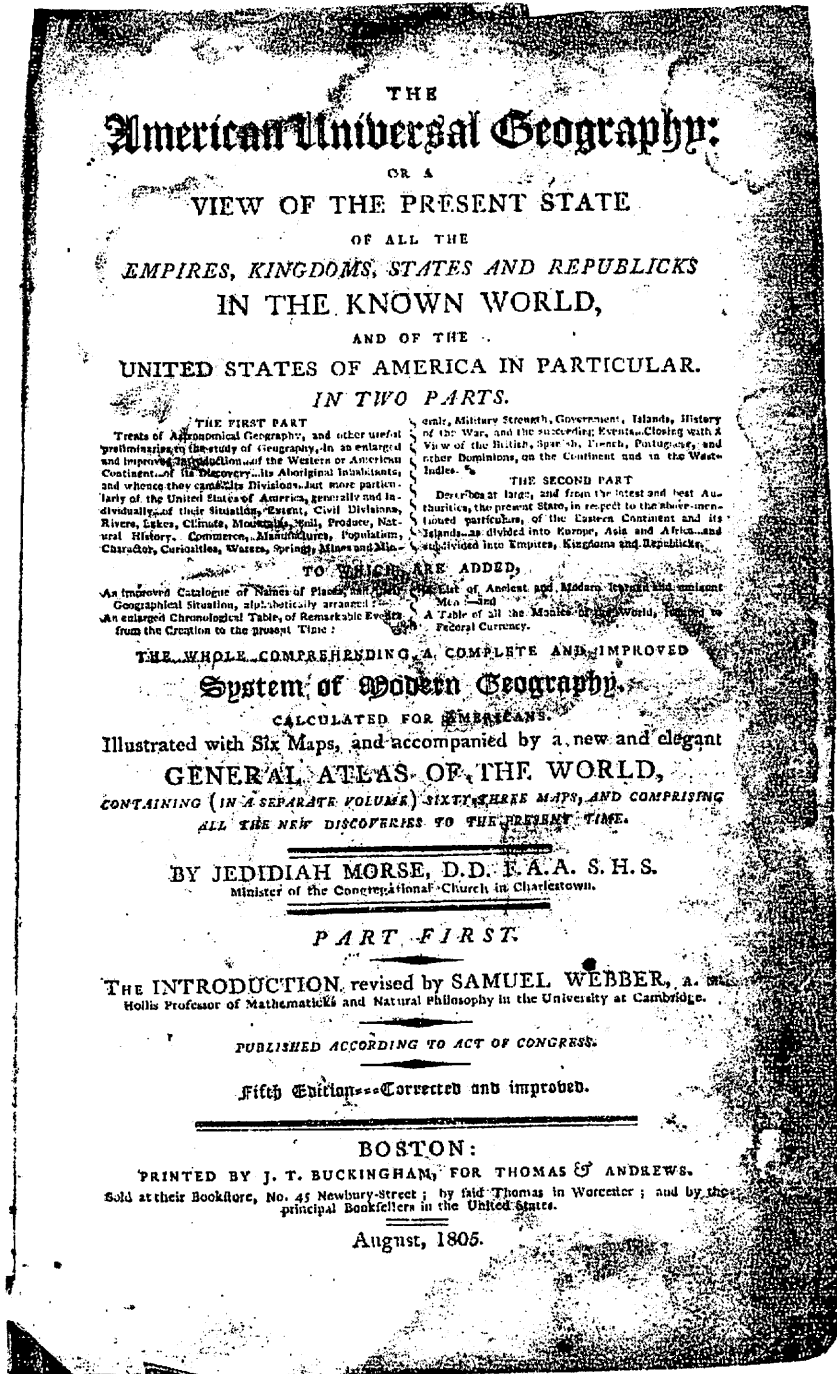
本稿では、実物入手できた『アメリカン・ユニバーサル・ジオグラフィ』(1805年版)を分析対象とする。モースはアメリカ地誌を中心とする『アメリカン・ジオグラフィ』を1789年に出版した。『アメリカン・ジオグラフィ』の刊行と同時に、さらに世界地誌を含んだ改訂版の作成に着手し、1793年に『アメリカン・ユニバーサル・ジオグラフィ』として出版する。『アメリカン・ユニバーサル・ジオグラフィ』は1796年、1802年、1805年、1812年、1819年に改訂される。

『アメリカン・ユニバーサル・ジオグラフィ』は2巻構成で、分析対象とした1805年版(第4版)は、第1巻はアメリカ大陸に関する記述を中心に864頁、第2巻はアメリカ大陸以外の世界に関する記述を中心に690頁という大部であった(第1図)(Morse, 1805)。

地誌記述の特徴としてまずあげたいのは、「万国地理」の教科書として執筆されている、という点である。周知のように近代地理学の先駆者は、17世紀ドイツの地理学者ワレニウス(Varennius, B. 1622-1650)であるとされている。ワレニウスは1650年に『一般地理学』(*Geographia Generalis*, 1650)を刊行し、同年アムステルダムで病死する。ワレニウスがフンボルト(Humboldt, A. V. 1769-1859)によって「近代地理学の祖」と高く評価されたのは、地理学総論に該当する「一般地理学」と地誌学にあたる「特殊地理学」に2大別したことによる。地誌学はその後ブリュン(Brun, M. C. 1775-1826)によってその重要性が継承される。世界地誌は、「万国地理」とされ、ブリュンが1810年から1829年の間に8巻発行した『万国地誌』が当時の主流であった(Martin et al., 1993)。『アメリカン・ユニバーサル・ジオグラフィ』はそれ以前に書かれたものであり、「万国地理」が当時の主流であったことを示している。

モースは「万国地理」と「特殊地理学」の違いを以下のように明確に示している(Morse, 1805: 17)。

地理学という用語はギリシア語に由来しており、文字通り地球の記述ということの意味する。地理学は数学を組み合わせたものから



第1図 モース『アメリカン・ユニバーサル・ジオグラフィー』表紙  
Morse, J. (1805): *The American Universal Geography; or a view of the present state of all the empires, kingdoms, states and republics in the known world* (2 vols.) による。



派生しており、地球の自然、表象、大きさ、情勢、生産物、住民などの記述が含まれている。地理学は、一般に地球全体について記述するとき「万国地理」(Universal Geography)と呼び、ある地方について記述するとき「特殊地理学」(Particular Geography)と呼んでいる。地理学の学問的な方法論は皮相的なものであったが、現在の状態にまで進歩してきた。地理学の概要について序で触れることは有益である。

このように「万国地理」と呼んで、世界地誌が地球全般の記述を含む広範のものであるとし、「特殊地理学」とは明確に区別していたことがわかる。

次に歴史学においては「万国史」をどのように扱っているか、という観点から検討を加えてみたい。Ⅱ章で述べたように、18世紀後半の歴史学においては「普遍史(Universalhistory)」から世界史(Worldhistory)」という流れがあり、ガッテラーは、『普遍史教科書』(1761)、『普遍史序説』(1771)、『世界史』(1785)、『世界史試論』(1792)の4冊の世界史教科書を著している(岡崎, 1996: 217-218)。そしてこれらのうち、前期の2冊の教科書には「普遍史」、後期の2冊の教科書には「世界史」という名称を用いている。つまり、ガッテラーの立場が、前期から後期へと変化していることがわかる。

一方、モースは一貫して「万国地理」という名称を用いている。世界史の場合、聖書の記述に基づいて書かれた世界史は「普遍史(万国史)」と呼んできた歴史がある。つまり、普遍史(万国史)はキリスト教的歴史が背景としてあるため、聖書の言葉が決定的な役割を果たすのである(岡崎, 1996: 5)。

そして、日本においても普及した「パーレー万国史」は、大きく普遍(万国)史的土台とその上にたてられた各国史という二つの要素から成り立っている、としている(岡崎, 1996: 247)。モースは「万国地理」と「特殊地理学」を明確に分けている。地理学において「万国地理」がどのような位置づけであったのかを検討するのは、資料をさらに収集する必要がある、今後の検討課題としたい。

地誌記述の特徴として2点目にあげたいのは、

天文地理の延長に位置しているという点である。地理学は中世以来のキリスト教世界観から「宇宙誌(Cosmographia)」と呼ばれていた。また、『アメリカン・ユニバーサル・ジオグラフィー』が発行された時代は、天文的な発見が盛んであった時代である。その成果を反映したいというモースの意図は、本書の冒頭の追録(Addend)において以下のようにみることができる(Morse, 1805: i)。

19世紀になって3つの新しい惑星が発見された。そのうちの2つはピアッツィ(Piazzi, G. 1746-1826)によって、1つはアルバート博士によって発見され、セレス(Ceres)、パラス(Pallas)、ジュノー(Juno)と名付けられた。セレスとパラスの軌道は火星と木星の間である。リーランドによると太陽の周囲を、セレスは4年7か月10日、パラスは4年7か月11日でまわる。

ここでモースが取り上げているのは主として火星と木星の軌道の間を楕円軌道を描いて運行している小惑星のことである。セレスはその後200年の間「最大の小惑星」であったが、2001年5月に南半球最大の反射望遠鏡をもつチリのセロ・トロロ天文台が「2001KX76」という最大の小惑星を発見している。

18世紀後半の天文学界では、英国のハーシェル(Herschel, W. 1738-1822)が、当時としては世界最高級の望遠鏡を自宅の裏庭に手作りで作って1781年3月13日、恒星よりも大きい星像を確認し、天王星(Uranus)を発見している。この発見が当時の天文学界に一大センセーションを巻き起こした。そして我こそ第2の新惑星を発見しようと多くの天文学者が惑星探しに血眼になっていた。1800年9月にボーデは部下のオルバース(Olbers, H. W. M. 1758-1840)など勤勉なドイツの天文学者たちと相談して、惑星が運行する道筋である黄道帯を綿密に探索する準備を開始した。オルバースたちは探索を続け、1802年にはパラスを、1804年にはベスタ(Vesta)を、そして1807年にはジュノーを発見することに成功した。また、パレルモ天文台長であったピアッツィが偶然1801年の元旦に最初の小惑星セレスを発見した(福島, 2003: 529-530)。モースの記

述はこのピアッツィの発見をすぐに反映していることがわかる。

さらにモースは、以下のように天文学の初期の歴史を大切にし、当時の学問とのつながりを確認している。そして、地理学の基盤を作り上げるギリシアの科学的なスタンスを尊重している (Morse, 1805 : 2)。

ティモカリスとアリストアルコス、紀元前300年頃に活躍し、恒星の緯線・経線をはじめて考えた。これは天の赤道の位置を尊重して考えたことである。2人の発見の1つは「春分点歳差」の発見で、それはヒッパルコスによって150年後に確定された。ヒッパルコスは、地球上の緯線・子午線を表すためにティモカリスとアリストアルコスの方法を用いた。このような堅実な理論が、科学としての地理の基盤を作り上げた。そしてそれは今日の天文学により接近したものとなっている。

このように、「天文学との関連・導入」、「太陽・惑星の直径や周期の表」、「彗星」、「恒星」、「地球の形状・大きさ・動き」、「軌道の学説」といった天文学の基本的知識が得られるような内容となっている。

第3の地誌記述の特徴は、アジア記述が充実している点である。アジアの大まかな把握は以下のように産業を中心としたとらえ方となっており、アジアを評価する内容となっている (Morse, 1805 : 456)。

アジアはヨーロッパやアフリカより広く、静穏な雰囲気であり、肥沃な土壌を持ち、美味な果実が結実し、高品質の植物、香辛料、ゴム、葉を産出する。鉱物も豊富で絹や綿は品質がよい。

注目すべきなのは、宗教的な記述である。アジアに関する宗教的な記述は、キリスト教徒・ユダヤ教徒・イスラム教徒以外は「異教徒」(heathen)というとらえ方であり、仏教徒はこの枠組みには入っていなかった。以下のようにイスラム教国家とそれ以外では認識が異なり、さらにキリスト教の布教については積極的である記述がみられる (Morse, 1805 : 457)。

オランダ人が最初にアジアに到達したときには、どうしたら専制君主の下で異なる考え方の政治体制の人々と一緒に暮らしていくことができるのか、非常に戸惑った。トルコ、アラビア、ペルシア、タタールの一部、インドの一部はイスラム教を信奉している。法典制定者のマホメットと信仰や生活の規則であるコーランとともに、ペルシアとインドの教徒はハリに、その他の地域はオマールに統率されている。タタールのその他の地域、インド、中国、日本、島々の大半は、異教徒が偶像崇拝者である。しかし、キリスト教は、トルコによるイスラム教の侵略によるキリスト教の失墜を忍びながら、素晴らしい勢いで広がりつつある。

最後に日本記述について提示したい (Morse, 1805 : 587-589)。

日本列島は、日本帝国を形成している。日本は最も専制的な、時には皇帝、時には王と呼ばれる君主に統治されている。日本は中国の東方150マイルに位置し、北緯30度から41度、東経130度から147度に広がっている。主要都市は江戸で、東経141度、北緯36度に位置している。土壌は中国と同様に豊かである。「日本」という名で知られる漆製品で有名である。高い崖と大荒れの海のため島には近寄りづらい。地震の被害も多く火山もたくさんある。交易の利益を独占するために、オランダがポルトガルを駆逐した。日本は孤立し、またキリスト教とも融和し得なかった。日本人の気質は従順であり恥づかしがりやであるが、一方でオランダ人の扱いは長崎の出島に貿易のできる場所を限定するなど厳格である。肌は黄色で、婦人の肌は白い。

日本人は細長い目で鋭い眉を持ち、中国人やタタール族に似ている。鼻は短く低い。日本人の髪は全体に黒く、髪飾りは将軍から農民に至るまで酷似している。服装についてはかなり昔からの形態がそのまま残っている。服はゆったりとしており、帯で留めるようにしている。女性の高位のものは絹でできた着物を着ているが、そうでないものは綿製の着

物を着ている。そして、毛織物で作った金や銀の花で飾る。

日本の家屋はまっすぐの柱からできており、竹を交差して組み合わせており、内外にはスラグを塗る。家屋は大体2階建てだが、上の階は低く、めったに人は住まない。屋根は断面がS字形の瓦に覆われていて、大きく重く作られている。床は地面から2フィート高めてあり、厚い板で覆われ筵がしいてある。部屋にはほとんど家具を置かず、机、いす、腰掛、ベンチ、カップボードがないだけでなく、ベッドもない。足を畳に置くという習慣になっており、いつも軟らかく清潔である。食事は床から数インチの場所の食卓の上に置く。一度に一つの皿だけを置く。部屋には姿見はあるが、装飾的な家具は置いていない。

日本の冬は寒さが厳しいので11月から3月までの間、暖房しなくてはならないが、銅の鉢があるだけで、暖炉だけでなくストーブもない。火鉢は中に灰が入っており、炭が入っているが、手順を守れば決して危険なことはない。訪問者に対する一番のもてなしは、一杯のお茶と一服の煙草である。扇子は男女とも利用し、手放せないものである。国全体が清潔であり、どの家も家風呂あるいは公衆浴場を毎日利用している。親に対しては尊敬というより服従というのが日本の特徴である。日本人の礼儀正しさは子どものときから見られる。日本の刑法は厳しいが、処刑はめったに行われぬ。犯罪がこれだけ少ない国もないであろう。

日本では商工業が発達しているが、ヨーロッパ人のような物質欲はあまりみられない。農業の重要性はよく知っており、丘の上まで耕作されている。日本人はオランダ人、中国人の許可された商人としか交易を行っていない。オランダ人は砂糖や香辛料、工業製品に加えて、20万以上の鹿の皮や10万以上の獣の皮をタイで得て日本に売っている。交易で得られる利益は取引額の40～45%にも達するという。オランダの会社は関税を支払わなかった。そのかわり、将軍に対して布、光沢のある絹布、綿、毛織物、装身具などのプレゼントを贈った。

日本地誌に関しては、日本が開国した1854年から60年代後半までに、外国で刊行された遠征記や日記はかなりの数にのぼるとされている。その中には、第二次世界大戦後、日本で翻刻され日本語で読むことができるものも多数ある。本稿で紹介したモースの地理書はそれ以前のものであり、その資料的価値は高い。

## V おわりに

本稿は、アメリカ建国期における地理教育の成立について、従来のアメリカ社会科成立史研究と近年の地理教育成立史研究の理論的研究について試論的考察を行った。従来のアメリカ社会科成立史研究においては、1916年のNEA中等教育改造審議会社会科委員会報告において社会科が成立したとされ、それ以前の地理教育や歴史教育は、知識注入の教科であったとして低い評価しか与えられていなかった。しかし、近年のアメリカにおける地理教育史に関する論考を整理し、地理教育の成立を建国期とし、重要な教科であったとするアントネリ、スミスらの研究を提示した。

次に、建国期に地理教育が誕生した背景を探るために、当時の政治のリーダーであったジョン・アダムズとサミュエル・アダムズの往復書簡を分析した。2人の手紙のやり取りから、ジェースの反乱の影響、共和主義思想や公教育をめぐる様々な葛藤が見受けられた。建国期は現代のアメリカ合衆国の思想的伝統を形成した時期であるとされるが、その中心的な思想である共和主義思想や公德心の育成のための教科としてクローズアップされたのが、地理教育であった。

さらに、建国期における地理学者で「アメリカ地理学の父」と評価されているモースが1793年に著した地理書『アメリカン・ユニバーサル・ジオグラフィー』の具体的記述を分析した。『アメリカン・ユニバーサル・ジオグラフィー』は、「地理学の概要」と「アジア記述」を中心に、基本理念、世界観、アジア像を読み取るうとした。教科書としてどのように利用されていたのか、という実態は不明であるが、モースの地理書は版情報はしっかりしており、多くのアメリカ人が本書を読んでいたことは明らかである。教科

書に利用されていた本書を分析することにより、当時のアメリカ人がどのように日本人を見ていたのか、ということを知ることができる。そして、その記述はかなり正確であったが、その原拠が何であったかは不明であり今後の課題である。

以上のように本稿ではアメリカにおいて建国期から地理教育が盛んに行われていたことを示した。建国期のアメリカ地理教育をどう捉えるか、という問題は非常に興味深い。この時代は学問分野としての近代地理学が確立した時期であると同時に、近代教育学の草創期でもある。残念ながら本稿では前者のフンボルト、リッター、後者のペスタロッチの影響については触れることができなかった。これも今後の課題としたい。

地理教育、歴史教育、そして社会科教育の発展の軌跡を現代まできちんと捉えなおすことこそ、混迷する21世紀の日本の地理教育改革に多くの示唆を与えてくれるのではないか。

## 参考文献

- 明石紀雄 (1999) : 独立から建国の時代, 紀平英作編『アメリカ史』山川出版社, 432p. 所収  
 有賀 貞 (1994) : アメリカ革命, 有賀貞ほか編著『世界歴史大系 アメリカ史1-17世紀〜1877年』山川出版社, pp. 111-201. 所収  
 福島登志夫 (2003) : 2万有引力の法則の発見. 磯部瑠三ほか編『天文の事典』浅倉書店, pp. 523-537. 所収  
 北野秋男 (1994) : 独立期における「統治」と「有徳化」のための知識普及—J. アダムズの政治及び教育思想の変容を中心に—. 教育学雑誌, 28, pp. 88-100.  
 北野秋男 (2003) : 『アメリカ公教育思想形成の史的研究』風間書房, 305p.  
 森分孝治 (1994) : 『アメリカ社会科教育成立史研究』風間書房, 884p.  
 岡崎勝世 (1996) : 『聖書vs. 世界史—キリスト教的歴史観とは何か』講談社, 254p.  
 岡崎勝世 (2000) : 『キリスト教的世界史から科学的世界史へ—ドイツ啓蒙主義歴史学研究』勁草書房, 334p.  
 斎藤 眞 (1992) : 『アメリカ革命史研究』東京大学出版会, 516p.

- 田部俊充 (2001) : 建国期アメリカにおける地理教育成立の一系譜. 新地理, 49 (2), pp. 18-30.  
 Adams, J. (1971) : The Works of John Adams, Vol. III, AMS Press, N. Y.  
 Brown, R. H. (1941) : The American Geographies of Jedidiah Morse. *Annals of American Geographers*, 31 (3), pp. 145-217.  
 Cremin, L. A. (1980) : *American Education: The National experience*. New York: Harper & Low, 607p.  
 Martin, G. J., James, P. E. and James E. W. (1993) : *All Possible Worlds: A History of Geographical Ideas*. John Wiley & Sons Inc, 585p.  
 Morse, J. (1805) : *The American Universal Geography: or a view of the present state of all the empires, kingdoms, states and republics in the known world... (2 vols.)*, Boston: Thomas & Andrews, 864, 664p.  
 Moss, R. (1995) : *The Life of Jedidiah Morse*, Knoxville, TN: University of Tennessee Press, 175p.  
 Schulten, S. (2001) : *The Geographical Imagination in America, 1880-1950*. Chicago: The University of Chicago Press, 319p.  
 Short, J. R. (2001) : *Representing the Republic: Mapping the United States, 1600-1900*, London: Reaktion Books Ltd, 256p.  
 Smith, B. A., Palmer, J. J. and Correia, S. T. (1995) : Social Studies and the birth of NCSS: 1783-1921. *Social Education*, 59 (7), pp. 393-398.  
 Walters, W. D. (1987) : Voices for Reform in American Geographical Education. *Journal of Geography*, 86 (4), pp. 156-160.

---

たべ としみつ (31期) : 日本女子大学人間社会学部

**The Birth of Geography Education in the United States of America (1)—Morse, J.(1761-1826):*The American Universal Geography*(1805)—**

**TABE Toshimitu**

According to Smith, Palmer and Correia(1995),the year 1783 marked the end of the American Revolution and set this country on a path as the United States of America. John Adams included geography as course of real value in human affairs.

There were at least a dozen Americans who wrote geographies during the Post-Revolutionary period. Geography was the dominant social science courses found in the early American curricula.

Brown(1941) identified Jedidiah Morse as "the Father of American Geography" and the first American geographer to write for an American audience. Morse's *The American Universal Geography*(1805) presented the geography of the United States and all over the world in some detail. The reader learned history, political organization,physical geography, climate,soil and productions.